

奈良市立都跡こども園 審査委員特別賞実践提案研究会 開催レポート

2016年7月16日（土）、2015年度ソニー幼児教育支援プログラム優秀園・審査委員特別賞の奈良市立都跡こども園において、審査委員特別賞実践提案研究会を開催しました。遠くは宮崎県や富山県など県内外の保育関係者や、市内の養成校の学生など、合わせて約220名の参加がありました。以下に、都跡こども園作成による開催レポートを掲載いたします。

研究会概要

1. 日時：2016年7月16日（土） 9:00～16:40
2. 会場：奈良市立都跡こども園
3. 主題：「科学する心を育てる～子ども自ら遊びを創る～」
4. プログラム
 - 1) 公開保育 9:30～11:10
 - 2) 開会式 11:10～11:25
 - 3) 実践発表 11:25～11:45
 - 4) 指導講評 11:45～12:10 演題「“もっと”が生まれる園文化」
講師 奈良教育大学 教授 横山 真貴子氏
 - 5) 分科会 13:10～15:00 担任より本日の保育の振り返り グループ協議
 - 6) 記念講演 15:00～16:30 演題「“もっとおもしろく”で広がる保育」
講師 東京大学大学院 教授 秋田 喜代美氏
 - 7) 閉会式 16:30～16:40

公開保育

3歳児は、保育者の側で砂や水や泡を使ったごちそう作り、ペットボトル容器をタライの水の中に落としたりトイに流したりする水遊び、泡を触ったりタオルを洗濯したりする泡遊び、太く短いパイプの中に泥を入れて持ち上げる泥遊びなどを楽しんでいた。それぞれに砂や泥、水、泡の感触を存分に味わったり、思い付いたことを何回も試したりして遊んでいた。



4歳児は、保育者と一緒にトイをつないでボールと泥を水で流すコース遊びや泡遊び、色水遊び、イカダ乗り、ステージ遊びなどを心ゆくまで楽しんでいた。色水遊びでは、水や石鹼、まほうの粉（洗濯糊）の量によって変化する様子をおもしろいと感じ、友達に伝えながら繰り返し試していた。友達と一緒にペットボトルで作ったイカダをプールに浮かべたり乗ったりする遊びや、曲に合わせて鍋やフライパン等による手作り楽器を鳴らす、ステージ遊びを楽しむ子どもたちもいた。自分たち考えたことを存分に試したり、考えを伝え合ったりする姿、感じたおもしろさを共感し合う姿が多く見られた。





5歳児は、芝生の丘でのウォータースライダーやペットボトルやウレタンマットの船作り、砂場で水の滑り台作り、泥や色水作りなど、水を存分に使い、場や物の特徴を活かしてダイナミックに遊んだ。ウォータースライダーの遊びでは水を流す量やタイミングを調整しながら、より速く遠くまで滑る方法を考えながら滑ったり、船作りでは大きな船が壊れないようにどのようにガムテープをとめるかを考えたり、とダイナミックな遊びの中に細かい子どもたちの調整や動きが見られた。友達と考えを出し合い、試行錯誤しながら自分たちで遊びを創り出していた。

最後に、遊んだ場で今日の遊びの振り返りを行った。それぞれの遊びの中で友達の考えや困っていることなどについて聞いたり、自分なりのアイデアを伝えたりなどして、互いの遊びについて共有し、「今度はこうしよう」と明日への期待を膨らませていた。

実践発表

昨年度の論文では、子どもが主体的に遊びを進めていく中で“もっとおもしろく”につながる保育者のかかわりで、環境構成や援助に視点をあてて考えた。その結果、環境構成はいつでも見られる、触れる、調べられる環境を継続して設定することが大切だということ、保育者の援助は「見守る」「認める・共感する」「提案する」の大きく3つに分けられるとわかり、その意図は年齢によって異なることが分かった。その姿を各学年の事例をもとに話をし、子どもの姿をしっかりと捉え、年齢に合わせた保育者の意図を持ち、環境構成や援助を工夫することによって“もっとおもしろく”しようとし、遊ぶ姿につながるということが分かった。また、保育者は決して意図した方向に向くように指導するのではなく、子どもと共に活動し、共に考えることが大切であるということが分かった。そして、子どもたちが“もっとおもしろくしよう”と主体的に遊ぶ姿こそ、子ども自ら遊びをつくることにつながり、そのことこそが「科学する心」を育むことではないかと思う。



分科会

3歳児・4歳児・5歳児の3グループに分かれて

『子ども自ら遊びを創る』“もっとおもしろく”につながる保育者のかかわりの視点で、以下の視点から付箋紙に記入しながら、主題に迫る話し合いを進めた。

(話し合いから抜粋)

- 「あれ、うまくいかないなあ」「どうしたらうまくいこう」「分かった!」「もっとおもしろくしよう」という子どもの姿
 - ・ いろいろ試せる環境があることで何度も繰り返し遊ぶ姿があった。もっとこうしたいと目標が子どもたちの中に生まれていた。
- “もっとおもしろく”につながる保育者の援助、環境構成について
 - ・ 成功することより「いかに自分で考えるおもしろさにつなげるか」が重要。「どうしたらうまくいこうか」を常に投げかけるのではなく、子どもの考えが実現するような環境の出し方や援助のタイミングが大事であり、偶然性を引き出し活かすことも大事。などの意見が出た。



指導講評

横山真貴子氏/奈良教育大学 教授

『“もっと”が生まれる園文化 自ら遊びを創り出す都跡こども園の子どもたち』を演題に平成26年度から今日に至るまでの本園の子どもたちの遊びの姿を具体的な保育の場面の写真を持ちいて指導講評していただいた。その中で、「おもしろくないと“もっと”にならない」「子どもたちが創り出すダイナミックな遊びを支える細やかさがある」「“やってみよう”が“今ここ”でかなう」「粘り強くやり遂げることが科学する心につながる」などのお話があった。都跡こども園では、遊びの伝承が行われ、そこにさらに新しい要素が加わって遊びがおもしろくなっていくこと。そして、目指す子どもの姿を明確にしながらその育ちの過程（道筋）は、子どもとともに創っていくことをお話していただき、改めて大切さを感じた。



記念講演

秋田喜代美氏/東京大学大学院 教授

『“もっとおもしろく”で広がる保育 都跡こども園に学ぶ』を演題にご講演いただいた。

始めに、「科学する心」を育てるための7つの視点と幼児教育支援プログラムの15年の歩みをお話ししていただいた。また、本園の論文から園文化の環境構成の工夫として「十分に、たっぷり、たくさん用意しておく」「動線を考えて設定する」「…しやすいようにする」「目につきやすいように置く」「近くに置くこと」「図鑑や絵本を年齢や関心に応じて提示し、皆が見える工夫をすること」「遊び試せる多様な素材の準備をすること」を具体的な写真をふんだんに見せながら挙げられていた。



本日の保育の姿からは、様々な遊びの場で子どもたちのつぶやきや、繰り返し試しながら遊んでいる姿を伝えていただき、今まで取り組んできた3年の積み重ね、「あこがれ、保育者、友達、失敗、伝え合う、試せる素材などが“もっと”を生むこと」を教えていただいた。

そして、昨年度の本園の論文の事例の中から「認める・共感する援助」「提案する援助」に焦点を当て、「あなたならどうしますか？」と参加者同士が意見を交換する機会をつくってくださった。この意見交換を踏まえた、先生の解説により「もっとおもしろくにつながる保育者の関わり」についてさらに学びを深める場となった。

また、「園内で様々な子どもの姿、活動・環境や場等についての話し合いを日常化すること、そこに指針や要領を持ち込み活かすこと」「家庭や地域に、遊びの中で子どもの創造性や探求心が育まれる様子を知らせ、連携を深めること」など大切なお話を聞かせていただき、教育・保育に携わる私たちにとってとても有意義な時間となった。

<「他園に学ぶ保育者研修」[※]への参加者による報告書より抜粋>

- 園全体で子どもたちの遊びの姿を共有し支援することの大切さを感じた。クラス、友達同士、保育者同士などで行う、今日の振り返りが明日の保育に繋がっていくことを学んだ。日常化が鍵であり、特別なこととしてではなく、日々の保育を大切にしていきたいと感じた。
- 都跡こども園のようなダイナミックな遊びの中には、そのダイナ

※他園に学ぶ保育者研修…

「科学する心」をテーマに取り組みされている幼稚園・保育所・認定こども園に所属する保育者の方々が、他園の保育から学び、主題の理解を深め、自園の保育の質の向上に繋げていく研修の機会を支援するため、ソニー教育財団が実施している助成制度。詳しくはソニー教育財団のホームページをご覧ください。

ミックを支える細やかさがある。細やかさが重なってダイナミックになっている。細やかさを大切にしていけること。そして、遊びの伝承がある保育のおもしろさ、次の学年に遊びの伝承がなされていることをとらえ、大事にしていくことを学んだ。

- 保育者の子どもへの関わりにより、遊びが充実したものになるか否かが変わってくると思った。子どもたちが期待をもって遊びを創っていけるように、いかに保育者の援助や環境構成が繋げていけるか、一番大切なことは保育者が子どもの目線になり、共に遊びを楽しむことだと思った。
- 『科学する心』の七つの視点について現行の教育課程の中では、収まりきれない視点でのより高い質の保育を目指して考えられているというお話に、『科学する心』の保育のすごさを感じ、さらにしっかり取り組んでいきたいと思った。
- 『もっとおもしろく』で広がる保育ということで都跡こども園の2014年2015年の保育の流れを聞かせていただき本日の保育につながってきたことが分かった。職員間の保育の振り返りに写真を活用し、教育要領につなげ、記録とカンファレンスを重ねていきたい。
- 『遊びこそ21世紀に必要な創造性を育てる』遊びに没入することで深い学習につながっていく。アクティブラーニングからディープアクティブラーニングへの方向性が新しい時代に必要な力となってくるということ知り、遊びを見る目や援助、環境構成の大切さを再認識した。
- 環境構成の大切なポイントについて、自園に活かしていきたい。園文化を大切にしたい環境構成の工夫をし、①十分にたっぷりたくさん用意しておく。②動線を考えて設定する。③目につきやすいように置いておく。④子どもの関心に合った、年齢に合った図鑑や絵本を置いておく。⑤選び試せる多様な素材の準備をする。
- 保育すること、この日、子どもを育てるということは『生きる喜びと希望を育てること』『挑戦することは、人生を面白くそれを克服する』『子ども時代に心の池が満たされると生涯枯れることのない泉となるでしょう』という言葉を中心に留め保育に臨んでいきたい。